相談屋マスター

吉川 潮

実業之日本社

相談屋マスター

吉川 潮

実業之日本社

相談屋マスター

一九九三年九月三十日　初版発行

著者　吉川　潮

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〇三(三五六二)二〇五一(編集)
TEL　〇三(三五三五)四四四一(販売)
振替　東京一―三二六　〒一〇四

支局　大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六(三一二)一五七三

印刷　大日本印刷　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN4-408-53207-X
© U.YOSHIKAWA　1993
Printed in Japan

相談屋マスター／目次

第一話　「彼女の親が結婚に反対で」　5
第二話　「女房に男がいるらしい」　41
第三話　「ヤクザと話をつけてくれ」　69
第四話　「息子が補導されちゃって」　99
第五話　「おふくろを引き取りたいが」　129
第六話　「あたし、好きな人がいるの」　163
第七話　「そろそろ年貢の納めどき」　191

装画／マタキサキコ
装幀／よなみね冴乃

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

相談屋マスター

第一話　「彼女の親が結婚に反対で」

その店に行くには、新宿からＪＲ中央線に乗って二つ目の東中野駅で下車していただきたい。大久保寄りの改札を出て左側の階段を降りる。正面の商店街をまっすぐ行けば早稲田通り、左手の線路沿いには不動産屋が軒を並べている。

東中野近辺は高級マンションから家賃の安い木造アパートまで貸間が多いため不動産屋もたくさんあるわけだ。

線路沿いの最初の路地が飲み屋街になっていて、入るとすぐに〈スナック　スワロー〉という看板が見える。ここが物語の舞台となる店である。

店内はスツールが八つのカウンターと四人がけのテーブル席が四つ。フローリングの床でテーブルと椅子も木を使っている山小屋風の洒落た内装だ。

カラオケは置いておらず、いつも有線放送のオールディーズがかかっている。電話台の下のマガジンラックには漫画週刊誌とスポーツ新聞がある。ボトルの棚は国産のウイスキーがほとんどで、舶来ウイスキーと高価なブランデーは数えるほどしかない。

メニューを見るとおつまみの種類が多く、食事類はピラフとスパゲティ、ピザトーストだけだ。

経営者の山谷雄次（やまたにゆうじ）は四十五歳。糊（のり）のきいたワイシャツに蝶ネクタイ、チェック柄のベストとい

う昔ながらのバーテンダーの格好をしており、それが中年太りで腹が出た体によく似合う。
細い目が優しげで、水商売にありがちな営業上の愛想笑いでない自然な笑顔が客に安心感を与える。
三月の彼岸を過ぎてだいぶ暖かくなってきたが、陽が落ちるとまだ冷え込む。そんな春の夕まぐれ時、雄次が開店準備をすませ表の看板に電気を入れたとたん、客が飛び込んできた。
「マスター、お願い。相談に乗って」
近所のマンションに住む瞳（ひとみ）という娘である。
瞳は歌舞伎町のクラブに勤めていて、出勤前に食事をしていく時もあれば店の帰りに仲間のホステスといっしょに飲みに来ることもある。
「どうしたんだい。その思い詰めた顔は男性問題だな」
「そうなの。恋愛の相談ならいつでも乗ってやるってマスター言ってたでしょ」
「ああ。どんな相談か話してごらん」
雄次は優しく水を向けた。
「実はあたし、パトロンがいるんだけど、好きな人ができちゃったんで別れたいと思ってるの。でもその人はまだ若いから稼ぎが少なくて、いっしょに暮らしてもあたしが店をやめたら食べていけないし……」
若いホステスにはよくある話である。くわしいことを聞くうちに、パトロンと別れる決心をつけるために瞳が相談していると推量した。新しい男に惚れ切っているようだから、パトロンと別

れるなと言っても聞くはずがない。そこで雄次は、彼女の気持に添ったアドバイスをしてやった。

「マスター、ありがとう。おかげで踏ん切りがついたわ」

瞳は入って来た時とは別人のように、晴れ晴れとした顔で出ていった。

男と女の恋愛沙汰の相談を受けるのは雄次の得意とするところである。それは雄次の経歴に由来する。

雄次は江東区の深川で生まれ育った。両親は門前仲町で居酒屋をやっていたから、客商売は親譲りと言える。商業高校を卒業後、新宿のレストランに就職してコックの見習いを始めたが修行の厳しさに辛抱できず店をやめてしまい、親の店を手伝うのも嫌なので歌舞伎町のキャバレーのボーイになった。

それが水商売の振り出しで、それから銀座に移ってバーテンの修行をした。スタンドバーでバーテンをした後、「黒服」と言われるクラブの従業員になった。大きな店になると黒服の数も多いのだが、雄次は気が利くのでホステスたちに人気がありなにかと頼りにされた。

何度か店を変え、最後に支配人として勤めた店が一流クラブの〈千鶴〉だった。ホステスや客から相談をされるようになったのはそのころからである。

あるホステスはこう言った。

「痩せてる人とかきつい顔の人って相談しにくいじゃない。なんだか冷たく突っ放されそうでさ。その点、山谷さんは小太りで優しそうな顔だから、気を許してなんでも話せるのよね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「彼女の親が結婚に反対で」

相談と言っても、ホステスや客が抱える男女問題は、単に話を聞いてもらいたいだけのことが多い。のろけたいだけのこともあれば、すでに結論を出しているのに自分の気持を再確認する意味で相談をすることもある。

その相手をするには、聞き上手であればいい。まず、相手の目を見て話を聞くのが基本である。時々顎を引いてうなずく。相手が話している最中は無駄な言葉をはさまず、適当にあいづちを打つだけ。そして話を聞き終えたら、腕組みして「うーん」と唸る。時には「難しい問題だねえ」と呟くこともある。どんな他愛のない相談でも当人は大問題と思っていることが多いから、そう言われれば悪い気はしない。

最前の瞳のようにすでに結論を出しているようならそれに添ったアドバイスをしてやればよいのだが、責任が重いのは相談者がどうしたらいいのか本当に迷っている時だ。雄次の忠告によって人生が左右される可能性もある。そういう場合は、とにかく相談者にとって一番いいと思ったことを率直に述べるしかない。そして自分ができる範囲で力になる。モットーは「誠心誠意」である。

そうして相談に乗っているうち、いつしか雄次は「相談屋」と言われるようになった。

五年前、父親が死んで、残された母親は居酒屋を閉めた。わずかながら遺産があって、雄次と姉の芳子にも分与された。雄次はいい機会だと思って、その遺産を資金に自分の店を持つことにした。そして〈千鶴〉をやめ、開店したのがこの〈スワロー〉である。

都会で生活する人間は相談する友達や家族がいないのか、それとも赤の他人であるスナックの

マスターのほうが話しやすいのか、客になにかと相談される。雄次も親身になって相談に乗ってやる。きょうも開店早々相談の客が飛び込んできた。瞳は必ず新しい恋人を連れて店に来て、御礼代わりにボトルを入れてくれるだろう。

瞳が出ていくのと入れ違いに、アルバイトの中国人留学生、劉麗花（りゅうれいか）が出勤してきた。

「おはようございます。遅くなってすいません」

麗花は勤め始めたころよりもだいぶうまくなった日本語で挨拶した。麗花は大学に通いながら、夜はこの店で働いている。物価が高い日本では本国からの仕送りだけではとても足らないらしく、バイト料を生活費の足しにしている。きょうは大学のサークル活動のある日なのでいつもより出勤が三十分遅い。

これまでも女子大生のアルバイトを使ったが、時間にルーズで自分の都合で店を休むため長続きしなかった。その点麗花は日本人の若い娘などよりはるかに真面目で、休んだことがない。

七時を過ぎると客が入り始めた。商店主、学生、ＯＬ、寮住まいのサラリーマン。いずれも東中野の住人たちだ。常連が多く、特にカウンターの隅っこの指定席で飲んでいる西村などは皆勤賞をあげたいほどである。

すぐ近くの産婦人科医で、十年前に妻を亡くした男やもめ。息子も医者で病院を手伝っており隠居してもいい身分だが、まだまだ引退するつもりはないらしい。毎晩のようにこの店へやって来て、雄次相手に飲むのが日課になっている。

「彼女の親が結婚に反対で」

「ようやく来月からプロ野球が開幕するな。野球がないと夜が長くてしかたない」
西村も雄次同様熱烈な野球ファン、それもスワローズファンだから気が合う。
「私も開幕が待ち遠しくて。今シーズンはどうですかね」
二人が順位予想をしているところへ矢崎典子がやって来た。近所の美容院に勤める美容師の典子は疲れた顔でカウンターに座った。
「マスター、ビールちょうだい」
「ずいぶん疲れてるみたいだね」
「うん。ちょっとあってね」
「また失恋したのかい」
典子は雄次によく恋愛の相談をしていた。たいていは片思いで失恋に終わり、「また振られちゃった」と明るく報告するのが常なのだが、今夜はいつもと様子が違う。
「新潟の母から電話があってね。田舎へ帰って見合いしろって言うの。その相手というのが、なんと再婚でしかも子持ちよ。そりゃああたしだって三十になったからぜいたくは言えないけど、いくらなんでも子持ちはないと思わない」
「思う。そんな見合い断わっちゃいな。典ちゃんなら今に素敵な男性が見つかるって」
お世辞ではなかった。気立てがよく、所帯を持ったらいい世話女房になりそうな女性なのだ。
典子はしばらく飲んでいたが、雄次がカウンターを出てテーブル席の客の相手をしている間に帰ってしまった。

酒井旭が女性連れで来たのは十時過ぎだった。酒井はまだ三十を過ぎたばかりだが、西麻布のフランス料理店、〈ル・ランデブー〉のシェフを勤めている。
「マスター、紹介するよ。浅田今日子さん。女性雑誌の編集をしている人だ」
酒井がちょっと照れながら紹介したところをみると、恋人なのかもしれない。
今日子は背が高く理知的な顔立ちで化粧はほとんどしていない。いかにも仕事ができそうな感じの女性だ。
「初めまして、浅田今日子と申します」
「ようこそいらっしゃいました」
「マスターのことは旭さんから伺ってまして、一度お会いしたいと思ってたんです」
「それは光栄です。こんな店ですが今後ともご贔屓下さい。お飲物は何を」
「バーボンのロックをいただきます」
「ジャックダニエルでよろしいですか」
「はい」
「じゃあ、僕も同じものをもらおうかな」
いつも国産ウイスキーの水割りを飲む酒井が彼女に合わせる。
今日子はバーボンをひと口含むと、うまそうに「おいしい……」と言った。その表情がなんともさわやかなので、思わず雄次は笑みを浮かべてうなずいた。酒が強い女性は多くなったが、飲みっぷりのよい女性は意外に少ないのだ。

話しているうち、言葉のはしはしに育ちのよさが伺われる。
「今日子さんはお父さんにお酒を教えてもらったんじゃないですか」
雄次が当て推量で言うと、今日子が驚いた顔をした。
「どうしてわかったんですの。旭さんにも言ったことないのに」
いいとこのお嬢さんが酒飲みなのはたいてい父親が酒好きで、面白半分に教えて家で飲んでるうちに強くなったケースが多い。今日子の場合もそうに違いないと踏んだのが当たった。
「私は占いの名人でして、黙って座ればピタリと当たる。それで店の名前も〈スワロー〉というんです」
「そうなんですか……」
そこへまだぐずぐずと飲んでいた西村が半畳を入れた。
「お嬢さん。だまされちゃいけませんよ。このマスターは昔、有閑マダムの若いツバメをしていたことがあって、それでスワローと付けたんです」
「本当ですか……」
「まさか。この面相でツバメなんかできるわけないじゃないですか」
「そう言えばそうだよね」
「酒井君。それはないだろ。お世辞にもそんなことありませんって言ってほしかったな」
雄次ががっかりした顔をしたので今日子が吹き出した。
「本当はね。マスターが熱烈なヤクルト・スワローズのファンだからさ」

酒井が正解をばらした。
今日子の酒は飲むほどに陽気になって、酒井と話している様子が実にほほえましい。
「旭さんはこのお店、いつごろから来てるの」
「開店してまもなくだから、もう五年になるかな。ねえ」
酒井が雄次を見た。
雄次はうなずきながら初めて酒井が店に来た時のことを思い出す。
閉店間際にやって来て、疲れ切った顔で水割りを頼んだ。見かけはとっつきにくいが、話してみるとなかなかの好漢だった。聞けば近くのアパートに引っ越してきたばかりでコックの修行中だという。フランスまで料理の修行に出かけ、帰国後は〈ル・ランデブー〉という一流レストランで、師匠にあたる宝田シェフの厳しい指導を受けているという。
とたんに雄次は親しみを抱いた。
自分は若いころはコックを志していたが挫折した身である。「あなたにはなんとか一人前の料理人になってもらいたい」と言うと、酒井は感激した面持で「頑張ります」と答えたものだ。
それがきっかけで常連客の一人になった。雄次は今どき珍しい職人気質の酒井が大のお気に入りで弟のように思っているし、東京に友人がいない酒井はなにかと雄次を頼りにしてくれる。
三か月前、師匠の宝田が舞浜にできた新築ホテルの料理長として引き抜かれ、酒井は〈ル・ランデブー〉のシェフに昇格した。宝田が後に任せたのだから折紙が付いたわけで、それを聞いた雄次は誰よりも喜んだ。あとはお嫁さんを見つけるだけだなと話していたばかりだった。そこへ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com